叛旗

共産主義者同盟

9月1日

第116号　100円

発行所／蒼　氓　社
編集人　仲代真理　発行人　川崎文人
東京都新宿区百人町1－11－31斉藤ビル内(郵便番号160)　電話 03(362)0149／振替東京・1・162856番
(宛先蒼氓社)関西蒼氓社 電話 06(312)8263

定期購読　開封1年　2,700円　密封1年　3,300円　(〒代共)

若疑シク覚候ハバ
我等ノ所業終候処ヲ
爾等眼ヲ開テ看ヨ

現在時の
政治組織の帰すうは
政治〈実践〉の固有時の現実へ

牧歌的政治への退行も、情報的政治への迎合にも向かわない、では、我々の政治はどこへ向かっているのか、また、わが政治党派の射程は何処にとどいているのか。われらが在るから組織が維持されているのでも、組織が在るからわれらの日々が構成されているわけでもない。集団の中の個という位置は、やはり個は個であるという自己同一性の視座との落差を孕まねばならないということである。状況にとっての切実さと、思想にとっての切実さ、あるいは社会(大衆)にとっての切実さ、自己にとっての切実さがスパークする処に現出する政治の不能性こそ我々の現在なのである。我々の個々が時代の現存的帯域での自己統括の不透明さの裡に、個の抜け方としての断念さを引き寄せている。いいかえれば、同時代経験、一時代空間で切りとった政治の個々の側での回収が、集団編成の究極的根拠に出会っている。現下のあらゆる政治組織は、共同性に集団性が同致する方向でも、集団性に共同性が同致する方向でも自壊の道行を必至としている。共同性と集団性の乖離の扱い方に組織の〈格〉が射程として浮上するだろう。個から共同性を扱おうと、共同性から個を扱おうとそこでの錯合は、個と個の同在は可能かへ行き着く。比喩的にいえば、そうした問いかけ自体の過程が文学に返され、すべてを認めるだろうというところに政治の究極像があり得るとも言える。P・F・ドラッカは、個人を経済社会構成の側へ還元し、組織と人間の永続的同在性(可能性)をトップマネジメントの思想として提起した。「組織は敵」との怨嗟は、(言語)表現の外化が共同性足りうるという倒錯の可能性をみせている。問題は幻想と現実の共同性の双方へかかわる個ー集団の複眼によるヴィジョンではないだろうか。

情況的政治の局限への下降を

我々は更に、深く徹底した現下の密室的政治情況との対時を必須なものとしている。その止揚の回廊は増々か細く、途絶せんかの感は否定しえぬとしても。

旧来的な政治構成の無効性と戦後党派思想の頽廃の彼な方に突極の意志としての政治に立ち向かう血路は拓かれねばならない。それが我々の組織と思想の自滅をかけた闘いであるという悲観と、楽観との揺りもどしを踏みしだきながら。

はるかなる未踏と、我々の未完結性の残骸をさらしても尚、究極の意志する暗さは、異なるものであるにちがいないだろう。このことは革命へのロマン志向や、自己放棄の殉死(非転向)の仮託やと異なり、唯、行きつく所まで行くだけなのだという我々の帰結を語るにすぎない。

では、我々の累積的現在における政治組織の帰すうとは如何にあるだろうか。それはどのくらいの射程と現況判断の縦深さを持つものであるかにつながらなければなるまい。それ故に自己対象化の位置こそまず問われる。

我々は、我々の時代と、関係に累積させてきた思想と経験からはじめ、そこへ帰るのだというのが前提である。その不可逆性の事実は、個人に帰することも、集団に責を課すこともできるものではない。そこをはぐらかした一切の現在の清算は、その内身ではなく清算へ追いつめられた状況が切実なものであるだけである。

個人に回収してしまうならば、政治の転換、政治の再構成の対象化が、政治本質自体の変容の自己了解を伴うニヒリズムの屈折を生んでしまう。また、集団へ下駄をあずけてしまうならば、構改政治の枠組での有効性に組みし、冷飯だけは免がれることで自足してしまうだけなのである。

それ故に問題は政治の〈帯域〉であるという所以である。政治から下りる、下りないとは実体的にというより幻想的〈行為〉であらざるをえないのだ。そこでの混同は個々の倫理と生活の後づけにすぎなくなる。つまり相互検証、批判がし意性の範囲に移行してしまうのである。

現実的な生活と、自己意識のパランスシートの極限で突き出されている〈政治〉の不能性は、個人の問題でも集団の問題一般へも還えせるものでないということに自覚的であるべきだろう。政治の閉塞化がもたらす生活的政治日常の構成上の危機は、単に政治組織自体の衰滅によって終るものではない。仮に政治組織がその生命力を枯渇してしまうとすれば、その死は何との交換において為されたのかが問題となるからである。

社会が政治集団を析出するとしても、社会が大衆が政治組織に、自らの足跡を迫るわけではない。社会の、大衆の生活は、本質的に、党や国のためにではなくそれ自身のために存在しているのは自明だな事だからである。問題となるのは、大衆の生活利害意識の将外に存する政治の現実性の局限情況とそれを支える根源の思想なのである。その問題は離反や無関心によって片付けられるものではない。大衆に迎合せず、蔑視せず自体として生き死を為さんとする政治こそ政治の究極の暗部を覗かせてはいないか。

そこにおいてわが組織は、社会の現実との通路をひき寄せうると考える。政治思想が、全現実の喪失においてその死を向かえるときその回収はどのように為されるのか、そこでの集団や個人に何をかかえ込ませるのか。そうした問いが、我々の経験や思想を反転させたところに社会の壁がある。政治思想の現実の敗退は、政治集団の成員を個々に還すか。半分諾であるが半分は否である。政治集団はその思想の死を宣告されたとして短期的に現実を制圧しえていることは可能である。社会の状況的膨化は、政治集団の小児症を許容する(関心の将外に置く)多様化もまた促進させているのだ。

個ー集団混融域での政治とは、そうした共同性ー集団性の乖離のデッドロックから押し出されている。我々も含めて政治集団の存立基盤の動揺は、共同性ー集団性の背理を求心化させた制度としての形態を裸形化させていることに起因しているともいえる。だからといって「制度こそ敵」との認識を今さら強調しているわけではないのだ。制度としての政治集団というのは、何ものかの〈象徴〉として現出するものである。制度としての政治集団の形態化は、そっぽを向かれた社会への片想いを意味するだけであろう。象徴されるものが、制度の止揚を孕むには媒介を必要とする。

つまり、そんなにしてまで政治なのか、という自問の回収は、政治組織の〈死〉と交換されるものと同位の理論と実践へ至るということである。

一方で、制度としての政治集団の形態化は、個人が〈共同〉の威力の象徴であることを解体する。ここでいう個人とは特定の人格というのではなく、個々の振舞が〈共同〉の威力としてはかられてしまう外側かからの幻想的表象を意味している。いいかえれば、〈制度的なもの〉からひき剥されていく自己意識が、対面させられている幻想的表象の位相を依然として無化しうる媒介の欠如と出会っているということなのである。

政治表現と集団編成の根拠への踏み込みを

六十年安保の政治的、思想的闘いの総括の諸経緯は、現在においても克服しえていない多くの課題をつき出している。逆にいえば、六十年当時から現在まで横行している政治思想、文学、経済思想がどのような経験の修羅場をかいくぐってきたのかという側で、我々と交錯しうる内容を喪失させているということでもある。我々は、自らの経験と思想をかけて、根源的な問いへの回答の延期をねじ伏せねばなるまい。

とりわけ「自立思想」というコトバで語られてきた内容には、厳密な検証を為していく必要がある。谷川雁は『試行』において、日高六郎の「自立と連帯」という問題提起にたいして、政治嫌いの政治主義者としての日本知識人の典型の見取り図とみなし、かろうじて自滅をまぬがれた団地族的知識人の隣組でしかないと反論を加えた。日高六郎個人は現在でも三木武夫ガンバレのより徹底した構改ぶりを発揮しているが、運動としてベ平連からピーナッツ共闘へと波及している。

谷川雁は、そこで政治同盟と思想同盟の連環について語っている。谷川雁は、政治同盟の反政治的決定と思想同盟の反思想的決断を、心中の論理から関連づけたのである。つまり政治同盟の可能性を究極の自滅(双滅)という地点にまで煮つめられた人格的決断とことんまで機能的な生存という形に凝縮された非人格的体系との全面的な葛藤としてつなげている。また、思想同盟に不可欠の逆接的条件を、相手方の自滅の決断にたいするこちら側の承認として確認したのである。

これらは、六十年代前半の政治運動と思想運動の密通にたいする実践的、経験的な反措定の認識であった。てめえとの無理心中を強要している政治組織と、人格ぬきのひょんな総合化の論理と空っとぼけた論理のあやの生産性に関する主張をしている思想同盟としての根拠なき機能主義やマヌーバー主義の横行する状況への裁断の一つであったのだ。

言うまでもないが、谷川雁は、政治同盟についても思想同盟についても思惟的にではなく、自らの日本共産党と新日文の体験をもって語った。そして、谷川雁は日共新日文体験をもっての批判にたいする他者からの反批判にたいして、次のごとき前提を立てたのである。他者が責める権利をもつのは自分が自己の原理をどれだけ貫徹しえたかであって、日共、新日文一般の誤謬の責を負うべき私を追求するのはただ私自身である、という具合に。彼の私はむしろ正しすぎたのだという自負は、自他診断の側にゆだねられる私性と徹底して自己回収の基盤に他者の介入を排除する私性とのバランスシートに支えられていたのではないか。ここには日本の政治や文化の徒党が内部での責任追求を、免責の内側の許容度の範囲で為してきた、切っても切れないくされ縁的いやらしさへの拒絶の不可避性があったといえる。

同じく『試行』同人として六十年安保の自己検証を為した吉本隆明は一大衆として政治との境界をくぐり、撤収を為した。政治も文学も徒党を組まなかった吉本隆明が突きつけた問いは次のようなものであった。じぶんの全生涯の重さを、自己意識とし自己権力としてとりだすことができるかどうかというぎりぎりの問いである。それは、前衛の頽廃にたいするコントラ前衛コミュニケーションの提起として孤絶した情況との拮抗をみせたのである。吉本隆明の提起は、徹底して前衛の心情的基礎とは、大衆の関係として問題にされている。つまり政治にも思想にも主戦場として登場しない大衆への下降を極北とする拒絶の不可避性を屹立させたのである。

さて、問題は厳然として我々自身の帰すうなのだ。我々の押し出されてきた政治選択・持続が、ほんとうはだれからもどこからも責を追求されないという位相と、どんな場合も関係した場での帳尻は合わせなければならぬという相互負荷との関連づけの困難さの深化を直視せねばならない。党派性を止揚する党派性への固執、何時でも政治の舞台から退きうるという風な開明さの持つ、ある種のあやうさにこそ具体的なものとなっているはずである。

後づけした谷川雁の問題は、政治や文学の徒党から下りた後の態様に断念の意味を方向づけんとの再了解であった。また、吉本隆明の問題は、政治集団からの離脱と単独者結合の正当化がコントラ前衛コミュニケーションの宣伝であるわけではないということである。実体的有効性の対極での我々の党派政治の死活をかけた血路は、まず組織内の相互関係の断念の負的共同意志、集団倫理が行き着いたところからはじまりはしないか。それは心中の論理の同盟結合の転回、私的階級性と自己権力の関連への踏み込みを意味している。今、組織相互と、離脱者、支持者との相互負担は何に基盤を置いているのか。

〈表現〉・〈関係〉の自立から〈実践〉の徹底化を

〈表現〉と〈関係〉の自立の構造への対象化は、必須の〈交通〉の問題に突きあたる。政治のコミュニケートの問題は、自己意識の側へ、現実的な生活の側への接地の不能さの受感から内省されてきた。それは、我々にとっての日常過程での両価性ー政治組織における擬生活的日常位相と、成員個々の生活位相ーの構造の落差の回収として日々の実践形の問いであった。更に、持続的に関与してきている争議団運動(労組運動)、自治体、教組、学生運動等への最終的なコミュニケートの境界への判断として必須なものであった。

他者から強要ー許容される関係の責の負い方は、相互負担の相互規定をもたなければ、自己倫理か宗教的潤色によって屈折している。政治構想の社会の現実への下降は感性、習俗、信条の体系との拮抗を前提しているが故に、超出と孤絶の反転回路をくぐらねば、交通は成立しがたい。

現在の我々の組織の側では、幻想構成の側では、職業革命家の究極の問題を個々の成員の準位づけとして突き出している。常任ー非常任、労働者ー学生といった従来的なタームと、それらを基盤とした指導ー被指導の構成も解体過程を歩んでいる。何をもっての指導か、何を指導されるのか、自己意識の心身統括の対象化と、関係の錯合の対象化の困難性は、政治組織自身を平準化してきた。

ここから引き出されてくる設問は二つある。一つは、家族があり生活があり、そして政治へという比重が、政治があり、政治から下りられない家族があり、生活があるというように反転している問題である。他の一つは、戦前・戦後を通して他者の評価は別として、政治も文学もすべておれはやっているという個人の位相と、何故に組織を介して政治なのかという位相との関連のはずすことのできない問題である。これら二つの問題は本質的には同一の根源へ向かうものだろうが、現象的には単独者と集団という形で立ちあらわれている。(思想者と知的大衆という形も含めて)だからそこでの単独者の強調も集団の強調も表層的なものなのだ。

大衆の側からみれば、集団であろうと、個人であろうと同じく生活破綻者か好事家としてしか写らない。それは我々が政治と文学の境界を強調しようとも、水準的に政治的文学か文学的政治としてみられてしまう場合とも対応していない。つまり現実は幻想的にも現象的にも多重化している。重要なのはそうした現実を透徹する眼なのである。

政治があり、政治から下りられない生活があり、家族があるというのは絶対的な矛盾である。生活があり、家族があり、そして政治があるというベクトルは相対的矛盾であり、余裕のデッチ上げが解体すれば、生活へ家族へと撤収回路を担保しえるのである。だが、政治があり、政治から下りられない生活があり、家族があるというベクトルは、そこでの時間、労働性関係を自体として成立させることを困難にしている。

序列化としてではなく、自己意識と現実の生活の構造の対象化の内で政治が先行するという転倒は個々の幻想の生活の余裕の問題でも、対関係の了解度の問題でもない。端的にいえば政治組織内の相互負担の断念ではなく、共同倫理の問題ではないのか。唯、相互負担を支える基盤が、個々の自己倫理や怨念ではなく、可能にする途が困難であるということが問題なのだ。

そこから個々の側では、生活も家族も救出しえぬ政治はやはり途絶を不可避としてはいないか、へ向かう。その時には、労働も性も時間も歴史的累積たる習俗、感性信仰の体系の社会へかすめとられた自己放棄を承認せざるをえないのである。結果として政治を保持する時間、労働、性関係の構成はそれ故に社会関係の水準に規定されつつ、社会と対峙せざるをえない。このことは、我々にとっては当然のごとく政治至上化を意味するのではなく、政治にとっての時間(日常)、労働、性の存在を意味する。いいかえれば政治の自立への勝算薄き隘路なのである。

労働、家族、社会が主格であり過程的構成として政治もまた主格たらんとする情況を生としてくり込んでいく未踏の地平が我々の眼前にある。

情況は労働、性、言語を自体として自立させる疎外態の止揚へ、闘いの射程は長く、基盤は広くと政治に要請する。表現位相での政治思想の越境(交通)も、表現するということの孕む二重性(言語表現、実践行為)を手離さないことが根底とならねばならない。

政治の密室化という苛酷な情況下で、政治の再構成、政治理念の解体ヴィジョンの獲得への志向と共に、我々にとって、政治の交通の先細りもまた日常活動の壁である。

閉塞感の中の小さな手掛り

立花 薫

社会的関係の準位について

A 「叛旗」一二四号で「現実的生活の意志的対象化の裡で、人間と人間の関係は、第一には直接の同一性として、第二には、相互規定性として、つまり他方は一方の媒介であるものとして、第三に一方が他方にその対象を提供するものとして、いいかえれば、一方が他方の外的対象であるとき他方は一方の表象された対象として、自己の成熟が他方を産み出すものとして関係するのである。この現実的生活の構造の裡に現われる人間と人間の関係の準位が問われているのである。集団論（関係論）はこれらの問題を、歴史的・本質的に問うことである。」という記述があるのだが、どうも自分には読んでいて、いきなりというか、唐突というか眼に飛びこんできたという印象の方が強くて、どう理解したらいいのかとまどっている。何となく、そのモチーフというのはわかる様な気がしないではないが、とにかく唐突だというのがあって、まずこの辺から入ってくれないか。

立花 本当をいうと、自分もこの問題は、十二分に深められ、展開されているというのではないのだけれども、ただ筆がすべったというのでは誠実ではないと思う。自分の中では、この問題意識は随分と前からあるというのは間違いないのだけれど、いつも貧しいノートの片すみに残り続けていたことも確かだと思う。これは、この問題意識の質量が相対的に小さいというのではなくて、逆に、政治運動の帯域の中でますます僕をかりたてている問題意識なんだけれども、あまりにも大きくなりすぎて、ちょっと手に負えないなあ、という実感の方が強くてこまっていたというのが正直な処だ。

例えば、昔（獄中で）、サルトルの「存在と無」と「弁証法的理性批判」を読んだ時にその理論的展開の逆方向から、サルトルの中での道徳、倫理、実践に向けられた情熱というか、執念みたいなものを強烈に感じた。恐らく、サルトルの戦争体験とは、かくの如きものであったのかという驚きがあった。と同時に組織や集団の暗部や恥部を知り尽くしているな、という一種の感の様なものが走ったことを覚えている。

しかし、そう受感した時に、「存在と無」の中での、複数の人間の協力関係から「主体としてのわれわれ」という経験が生じても、それは移ろいやすい一時的なものであり、逆にある集団が他から客体化を受ける場合には「客体としてのわれわれ」という根本経験を通して、連帯性が産まれるのだ、という記述は、あやういのでないのか、ここにサルトルの政治思想の弱点があるのではないのか、といった問題意識が、割合とのっぴきならない形で出てきたと思います。

〈共同性〉へのアプローチ

A ちょっと、まってくれ、すると、引用した部分の記述は〈共同性〉の問題についてのアプローチということになるのかい。

立花 つまり、こうだと思うのです。吉本さんが「人間の集団的な共同性の最小の単位は、三人から成るもの」と考えることができる。A という人物と B という人物の関係、B という人物と C という人物の関係が想定されれば、C と A との関係が直接的であっても、A と C の関係が直接的であっても、人間の共同的な集団にあらわれる問題のすべての原型は、このなかで典型的に推定することができる。」（「機能的論理の位相」）という記述で単純なモデルを提示しているのですが A と B の関係、B と C の関係、そして直接的にしろ間接的にしろ A と C との関係というものは、どの様な普遍的な展開をもつのか、単純なモデルと複雑な集団の構造はどの様な過程的な構造を有するのか、その時の、A、B、C はどの様な〈人間〉として振舞い、現われるのかという〈課題〉は、割合と〈構造〉的にも、歴史的にも未成の分野であるというのが僕の判断な訳です。

〈共同性〉の問題、人間の共同的な集団にあらわれる問題を知解することは、現代的に、情況的に切実なことだと思います。

ですが、現在、この問題は、僕にとってのっぴきならない程、切実な課題なのですが、もう少し展開しきれないというジレンマを有しています。

対自的な抜け方と対他的な抜け方

A 随分とスコラ的な話になってきているので、僕には理論的な提出のされ方の光源という辺に話をすりかえてみようと思うのだけれども…

立花 例えば、太宰治というのは割合と好きなのです。どこが好きかといいますと、意識相互の相克的な関係に際して、つまり、自らの主体性を打ち消そうとするか他方の主体を打ち消そうとするかのジレンマに際して、人間の為〉という仮構的な倫理の屹水線を想定して、人間の現実的な関係でのの課題に自分の現存性を押しかえしたという点にあると思います。若しかし、これは矛盾なのです。不可能なのだと思います。なぜなら、〈人間の為〉という倫理は、社会倫理の問題であって、文学的な創造作用の問題ではないからです。

けれども、仮構的な屹水線をデッチあげることによって、文学として現実的な人間の構造の直実に抜けたというのは驚きです。ですからひるがえって考えてみますと政治運動の渦中にあった太宰は、集団の中で良く孤立に耐え、精力的で活動的な戦士だったという印象を多くに与えていたと思います。なぜならば、彼らの自己投入した政治運動は、現実の関係の裡での社会倫理的事柄をついにつかみえていなかったからです。

そうすると、じゃあどこが根本的な問題であるのかということですが、おそらく、社会と和解しえない、社会と関係づけられない。そういった不安を太宰は体現していたといえます。社会と和解しえないという問題は、究極的には、自分自身と和解しえないという問題を知解していかなければならないと思います。その意味で〈共同性〉の問題、人間の共同的な集団にあらわれる問題を知解することは、現代的に、情況的に切実なことだと思います。

ですが、現在、この問題は、僕にとってのっぴきならない程、切実な課題なのですが、もう少し展開しきれないというジレンマを有しています。

人間の自己および自然からの自己疎外は、自己及び自然と他の人間にあたえる関係に現われます。ですから実践的には、自己の他の人間に与える関係の構造の対象化から人間の自己及び自然に与える関係（自己疎外）の構造に到達するのだと思います。しかし、意識的な存在相互の関係からの抜け方は、実践的には、対自的に抜けつまり〈表出〉性の構造として抜けるという問題と、対他性の構造の知解を通して意識相互の相克的な関係の構造として抜けるという問題とは、二重にはらんでいると思うのです。つまり異質なプロセスをも有しているのだと思います。

ですから、僕は、人間の自己及び自然からの自己疎外という基底と人間と人間の関係の構造は、AとB、BとC、CとD、DとE……という無限の連環体の、別の言い方とすれば、A、B、C、D、E……での無数の関係の組合せの中から人間相互の関係の普遍的な準位を取り出すことなのではないか、といった問題意識をもったと思います。そういう意味で三重の仮説を提示してみたのだと思います。

マルクスは生産的な行為を場とする経済過程で、労働者と非労働者の関係を本質的に展開したわけですが、観念的な行為を場とした相互の、性的行為を場とした相互の関係を、人間と人間の関係としてとらえ把握した時の普遍的な構成とはどうなっているのかは示さなかったと思います。

そうすると、AとB、BとCの関係がもたらす、AとCの直接的、関接的な関係には、人間のAとの様な「部分」の過程的な参入があり得るのかという点について、言語過程、労働過程、性過程を軸にして、人間と人間の現実的な関係の準位をクロスさせて考察しなければならないと思います。

また吉本さんが提起されている共同性のなかで個々の成員が示す〈人部分的な登場から逆立へ〉いたる過程的構造の問題を知解していかなければならないと思います。

集団的共同性の構造の知解

A そこで、集団の共同性の問題に入りたいのだが、今度、「集団の会」が14年の共同研究の成果として「サークルの戦後思想史」というサブタイトルを付した「共同研究―集団」を発刊したのだけれど、もう読んだかい。

立花 綱密に読んではいないけれど、なんとか手に入れて（とにかく高いからね）さっと読んだことは読んだけどね。

A 感想というのも何んだけれど、批評めいたものでもいいから語ってくれないか。

立花 僕は、こういうことが最終的にあると思います。集団に参入する個人が、その参入する個人の位相（いいかえれば自己の部分性）を、たえず自己自身との折り合いという方向に自覚化し得れば

ならないと思います。その意味で〈共同性〉の問題、人間の共同的な集団にあらわれる問題を知解することは、現代的に、情況的に切実なことだと思います。

ですが、現在、この問題は、僕にとってのっぴきならない程、切実な課題なのですが、もう少し展開しきれないというジレンマを有しています。

人間の自己および自然からの自己疎外は、自己及び自然と他の人間にあたえる関係に現われます。ですから実践的には、自己の他の人間に与える関係の構造の対象化から人間の自己及び自然に与える関係（自己疎外）の構造に到達するのだと思います。しかし、意識的な存在相互の関係からの抜け方は、実践的には、対自的に抜けつまり〈表出〉性の構造として抜けるという問題と、対他性の構造の知解を通して意識相互の相克的な関係の構造として抜けるという問題とは、二重にはらんでいると思うのです。つまり異質なプロセスをも有しているのだと思います。

ですから、僕は、人間の自己及び自然からの自己疎外という基底と人間と人間の関係の構造は、AとB、BとC、CとD、DとE……という無限の連環体の、別の言い方とすれば、A、B、C、D、E……での無数の関係の組合せの中から人間相互の関係の普遍的な準位を取り出すことなのではないか、といった問題意識をもったと思います。そういう意味で三重の仮説を提示してみたのだと思います。

マルクスは生産的な行為を場とする経済過程で、労働者と非労働者の関係を本質的に展開したわけですが、観念的な行為を場とした相互の、性的行為を場とした相互の関係を、人間と人間の関係としてとらえ把握した時の普遍的な構成とはどうなっているのかは示さなかったと思います。

そうすると、AとB、BとCの関係がもたらす、AとCの直接的、関接的な関係には、人間のAとの様な「部分」の過程的な参入があり得るのかという点について、言語過程、労働過程、性過程を軸にして、人間と人間の現実的な関係の準位をクロスさせて考察しなければならないと思います。

また吉本さんが提起されている共同性のなかで個々の成員が示す〈人部分的な登場から逆立へ〉いたる過程的構造の問題を知解していかなければならないという問題は、究極的には、自分自身と和解しえないという問題を知解することは、現代的に、情況的に切実なことだと思います。

ですが、現在、この問題は、僕にとってのっぴきならない程、切実な課題なのですが、もう少し展開しきれないというジレンマを有しています。

人間の自己および自然からの自己疎外は、自己及び自然と他の人間にあたえる関係に現われます。ですから実践的には、自己の他の人間に与える関係の構造の対象化から人間の自己及び自然に与える関係（自己疎外）の構造に到達するのだと思います。しかし、意識的な存在相互の関係からの抜け方は、実践的には、対自的に抜けつまり〈表出〉性の構造として抜けるという問題と、対他性の構造の知解を通して意識相互の相克的な関係の構造として抜けるという問題とは、二重にはらんでいると思うのです。つまり異質なプロセスをも有しているのだと思います。

ですから、僕は、人間の自己及び自然からの自己疎外という基底と人間と人間の関係の構造は、AとB、BとC、CとD、DとE……という無限の連環体の、別の言い方とすれば、A、B、C、D、E……での無数の関係の組合せの中から人間相互の関係の普遍的な準位を取り出すことなのではないか、といった問題意識をもったと思います。そういう意味で三重の仮説を提示してみたのだと思います。

マルクスは生産的な行為を場とする経済過程で、労働者と非労働者の関係を本質的に展開したわけですが、観念的な行為を場とした相互の、性的行為を場とした相互の関係を、人間と人間の関係としてとらえ把握した時の普遍的な構成とはどうなっているのかは示さなかったと思います。

そうすると、AとB、BとCの関係がもたらす、AとCの直接的、関接的な関係には、人間のAとの様な「部分」の過程的な参入があり得るのかという点について、言語過程、労働過程、性過程を軸にして、人間と人間の現実的な関係の準位をクロスさせて考察しなければならないと思います。

また吉本さんが提起されている共同性のなかで個々の成員が示す〈人部分的な登場から逆立へ〉いたる過程的構造の問題を知解していかなければならないという問題は、究極的には、自分自身と和解しえないという問題を知解することは、現代的に、情況的に切実なことだと思います。

ですが、現在、この問題は、僕にとってのっぴきならない程、切実な課題なのですが、もう少し展開しきれないというジレンマを有しています。

政治党派の切実な課題とは

A 今日は、少し理論的な問題をあけていくのかという問題意識を手離さない為には、多くの過渡的な、あるいは過程的な問題をはらむと思います。

アイデアルなことからいえば、人間は、自然や自分自身との関係において全て折り合いがつけば、家族関係の中でも、社会関係の中でも折り合いがつけ得るのですが現実はそうではない。しかし、家族関係の中で折り合いをつけたい社会関係の中で折り合いをつけたいという個人の切実な願いは、ますます大きくなっていくことは情況の中心的な核だと思います。

政治党派の構成員にとって、こういった情況的な切実さに接近していくという問題と、個々人が、自己自身と折り合いをつけたいという内在性が同在している訳ですが、ここの対象的な相互関係は実際、のっぴきならない程、困難であるといえます。

まあ、シャベリたいことは沢山あることはあるのですが、この辺で一応終りたいと思います。

情況的政治の更なる深化へ

京浜地区反帝戦線労働者会議

□■□ 実践総括の視座

私達は、今春の労闘運続講座や6/18三上集会への関与を別にすれば、地区労働者討論集会の連続的開催と弘済会闘争への関与を行なって来た。限定されたこの間の実践から世界を構成するという事の限定性を自覚した上で、なおかつ、私達の累積的課題での判断と今後のより主体的な実践にひきつけた問題意識の整理をなしてゆきたい。おそらくこの時は、私達の実践の体験や事実(労働者会議の内部的問題も含めて)を独自的に扱うという事はできない。そこでの課題を最大限、全情況的な課題としてどうか、という側からしか独自的な課題自体にも十分には回答しきれない時代に突入している事は既に明白であると思える。

私達のこの間の討論会や弘済会支援の経験の中で、もしくは、労闘連続講座や光文社、教育社への関与も含めて、浮上して来た課題を扱う視座は既に様々な所から提起されている様に、いくつかのタームがある。例えば・社会的局所の運動にに対する評価の軸と政治集団の関与の準位という風に、もしくはより私達の側での問題として、支援フラクと政治的他フラクとの関係の位置と相互交通の軸という風に。これらのタームは、常に私達にとって切実な課題であったし、実際の現実的局面の中では混在して浮上しながら避けて通れない課題でもあった。

しかしながら私達のより現実的な問題意識からいえば、これらのタームはどこか不十分であり、より枠を広げなければ、理論的に言っても、現実的に言っても、ちょっと困難であるという感覚を持たされてきた。もちろんこの様に言ったからといって、私達のこの間の実践や表現が、それらのタームの位相と領域において、既に解明しており、自明のものとなっておりその先の思想的なあるいは理論的な解明が問題になっているというのではない。理論の域から言えば、それらの解明のためとして感性の域からすれば、より包括的な(より現実的な)視座が共通のものとならなければ、<組織>の実践の問題からすればちょっとキツイという感覚があるという事だ。

例えば政治闘争と社会闘争、政治集団と社会集団、あるいは当該と支援という風なタームにおいて私達が主張してきたのは、いわば旧来的な<政治>が、あるものは社会的な過程と地続きに構成され社会の生産関係から国家と政治を見るというものであり、あるものは政治過程を、個の<階級意識>に還元し、宗教的な<政治>しか構成することができないという様な、政治の情況に対して批判をあびせるためであった。いわばいわゆる構改的な思潮と、政治過程主義的な思潮に対して国家と市民社会の、あるいは全幻想の構造の問題として<戦後>の指標を措定し、政治闘争の、社会的諸運動の軸を定立するためであったと言って良い。もちろん現在我々が社会的諸運動に関与する時の構成は更に深化されている。社会的運動、とりわけ労働者運動、職場運動や争議の範囲において、現在の民衆の間における感性と理念の所在が分析され、政治集団内における個々の活動家の日常構成の時代的水圧に踏み込む事によっていわば、<関係>の問題と<生活>の問題により踏み込む事によって現在の時代における<闘い>の中心的な課題に肉迫してきたと言って良い。そしてこの事は現実的な局面の中で例えば、被告団問題やカンパ問題、そして三上問題を経る中で、更に<政治>の問題として、あるいは<政治組織>の問題として内化され、あるいは情況の指標の問題として定在されてきた。そして現在の私達にとってのより切実な課題はおそらくその先にある。その事を、本小文で私達の実践の中から、若干の整理と提起としてなしていきたいと思う。

□■□ <個のモチーフ>意識の浮上と文章問題

私達のこの間の直接的、間接的な経験の中で、例えば争議支援の時においても、地区討論会の時においても、それらの課題に対する意味的構成が大枠においては一致していると受感しつつも、どこか厳密な概念構成や感性の有様や表現の構成の問題にまで至らない、というもどかしさを感じさせられてきた。それは総括論争の中における視座の多義性へ、あるいは<個のモチーフ>意識の浮上として露呈してきた。おそらくこの<個のモチーフ>意識(個のモチーフ自体ではなく、それを扱わねばという意識)の浮上の背後にはふたつの事が潜んでいる。それは個々の政治的な経験やその中で累積されてきた観念が、時代の水準の前で、「まず自己の意識が変らなければ」という恐迫的な感性を持たされている事だ。ここでは、いかなる共同的な観念も、まず自己を通過しなければならないという意味での、まず自己の経験と感性を対象化しなければならない、という意味での、<情況的政治>に向う自己の有様を巡る格闘が浮上するという事だ。そしてこの事は、私達(政治集団の構成員)のみならず、自己の経験や、その中で構成したひとつの共同的な思想(生活思想の範囲も含めて)が、他者への関係付けの中でも、自己の統括の中でも何らの力を持たない、という事態に直面した時の、個の言い様もない孤立感と、他者との関係における断念が自己を覆っているという時代の共通の壁であると言って良い。

そしてまた、もうひとつの問題は、<政治>を旧来的な意味ではそれ自体として扱う事が困難であり、<政治>を対象化する、もしくは構成する契機と回路をどのように創出するか、と問う時の個の<生活>と<経験>の浮上のさせ方の問題としてである。ここではどこまで、自己の経験が新たな経験を惹起しうるか、そしてまた、自己の<生活>の対象化がどこまで他者の<生活>像をくり込めるかが問題になっている。

しかしながらこの様な<個のモチーフ>意識の浮上も、<生活>や<経験>への内省も、それ自体の内部で基準を持つ事は困難である。それは丁度、価値構成として<し意性>や<家族>問題の浮上が、政治的な思想の内部にそのまま定立させることができない様に、政治帯域の問題として浮上するという事と、それ自体の自足性を問題にするという事とは位相が異なるからだ。ここではあらかじめ準備された基準がない所で、しかしながらそこを経由しなければ心身行動が不可能であるという位相で<個のモチーフ>が扱われる。もちろん<個のモチーフ>といっても、そのことは自体的に、あるいは先験化されてある訳ではない。当然にもなく、個々人の経験累積(家族―労働―政治の総範囲にわたる)の中で構成されてきたものであり、これ自身も対的な、あるいは共同的な関係と観念の中で構成されてきたものであることは自明の事である。ただ個々人がその様な対的な、あるいは共同的な関係と観念の累積をひきよせる時あるいは<判断>として切り取る時の内容が微妙な差異を産むという事だ。だから<個のモチーフ>意識は不可避に自己の思想の形成のプロセスの公開へ、あるいは当面の共同的な課題との連関の中での<判断>の厳密なつき合わせへと進む。

この事はまた、書き言葉の位相においても反映されている。組織文章を書くことが困難となっている、という事態の中にはおそらくふたつの事柄が示されている。そのひとつは、書き言葉における個―組織位相の問題であり、ひとつには、沈黙や話し言葉との連関の問題である。組織文章が書けないという事は当然にも基本的には個の行為である文章作業の中に<組織>を集約することの困難性を示している。ここでは<組織>が個の内部に、あるいは個的営為の内部にその中心的な課題を反射させる事ができないという事が問題になっている。<組織>はその内部における諸編成の日常的な累積の裡に、そして組織内諸編成の内部では更に個の日常構成の裡に、問題を浮上させるという時代に突入している。そして個の内部世界から外的世界を構成するという事もできなければ、外的世界の対象化の裡に個を貫通する契機を構成することもできない。言い換えれば、個の内部にも組織の外形にも逃げることができないという時代の中で私達は、ただその連関の中に、交点の中に、<政治>を構成するしかない事は明らかになっているが、問題はその連関と交点を表現と関係の双方に開放していく回路であると言って良い。だから組織文章を書けないという事は決して、個人文章が書きやすいという事ではない。旧来的な範型の問題として、組織文章の中では個のモチーフは最小限に抑制され、それから脱する範囲を個人文章に表現する、という構成は既に基本的に解体されている。ここではもうひとつの問題、即ち沈黙や話し言葉の領域との連関が浮上している。何故なら、私達が、個か組織かというフレームから離れて、個も組織もという立場に立った時、そこでの問題は当然にも、個の内部での発語の原基が、個と個の間での沈黙の話し言葉の問題が、文章表現の限定性をどこまで包括しているかが問題になっているからだ。言語的な表現がより現存的な個の生活の構成と、関係の構成に拮抗するためには意識的な踏み込みを必須としている。

□■□ <関与>の回収の問題

現在の国家―市民社会の構成が、あるいは共同的な幻想の構造が、ますます政治的な国家の相対化と社会的なそれの膨化へと変容している事はこの間私達の再三にわたって主張してきた事柄である。この様な構造変容の中では、文字通り<国家>も<政治>も異常に距離感をもって、かつ拡散したものとして表われ、膨大に社会的諸関係の中での苦闘を強いられるが、しかしながらそのような闘いの総和も結局は、国家にも政治にも至りつかないことは明白である。もちろんこの事は社会的諸領域における闘いを無意味なものとする訳では決してなく、逆にそこでの矛盾を巡る闘いはますます激発するであろう事は疑いえないと思われる。ただここでの政治的な位相と社会的諸領域における闘いとの構成は、政治運動と社会運動の区別と連関という言葉一般ではますますとらえ切れないものとして浮上している。ここでは旧来の「政治理論」における社会的運動と政治運動との結合というような迷妄とは全く違った所で、社会的運動の内部水圧は、政治運動の変容をもたらしてきた全情況を反映しているという意味で、ますます情況本質の浮上という帯域で、その共通の構成を有していると言って良い。政治運動の変容は更に社会的諸運動への関与の内的構成の深化を問うている。政治運動においても社会的なそれにおいても、ますます現存的世界の抽象を要請している様に思われる。私達が社会的局所における<場>の思想の構成とあるところで共通の軸を有し、あるところで拮抗すべき点はここにあるし、現在の政治帯域と政治表現の軸はここにあると言える。

だからこそ、前に述べた様な<個>の思想と表現を巡る<個―組織>問題が浮上していると言える。政治思想があるところで<時代>の自己思想の産物としてあるところでは、徹底して<時代>感覚の共通性の問題として、又自己思想の構成度(日常統括も含めて)の問題としてある事ははっきりしている。そして、自己思想の構成度が問題であるという時とりわけ言語表現の範囲でこの事が浮上する時、逆に言えば徹底してこの事の、関係的な範囲への回収の途の想定が要請されているはずである。

私達が社会的局所における闘いに関与(支援でなくとも)する時そこで見るものは、膨大に個の内部で累積している生活を巡る観念や、情況に対する感性といったものが、その回収の途をどこに求めたら良いのか、ちょっとむずかしいという有様であると言える。何よりもその回収の途を、組合内部や職場の関係域内部で相互的に扱う事の困難性を私達は見る事ができる。例え争議や運動的に高揚している組合運動以外でも、私達はそこでの基本的な問題の有様と、歴史的な位置を措定する事は一定のレベルで可能であると言える。そして例えば一組と二組、組合員と非組合員、あるいは組合内部のいわゆる強硬派と収拾派という風な相互対立の条件の中で、そのような基本的な問題がより顕現化され、その関係の中である理念が応酬される時、私達はよりリアルにその問題を把える事ができる。

もちろん、私達が社会的局所における闘いの中に、現在の情況的な課題を見てとる事ができる、という事と、具体的な当該―支援関係の中で私達が<判断>を構成する、という事は別物であり、本当の困難な点はここにある。当然にも当該と異なり、そこでの自体的課題として<生活>問題は浮上してはこない。しかしながら私達がそこでの<判断>を具体的に押し出そうとする時、心的にも身体的にも私達自身の<日常構成>を対象的に(よりリアルに)扱わざるを得ない。ここでは私達の個々が政治的に構成してきた<日常構成>の中で累積させてきた相互関係とは異質な要素を(そして何よりも私達にとっては不確定的な要素を)繰り込まざるを得ないし、その異質な要素を累積的な相互関係に還流させねばならない。だからここではまず何よりも、私達自身の構成する政治思想と政治日常が問題となるし、ここでの水準が私達自身の関与の水準を半分規定している。(もちろん他の半分は争議や当該運動自体の累積の水準である。)

□■□ 表現の<現存>との拮抗

いつでも集団の表現や編成は、歴史的に累積されたその位相における集団の表現や編成に規定される平面、よりその時代情況に対する意志的な判断の構成の内化の水準に規定されている。私達の表現が時代の側から、集団的な身体表現を回収困難なものとさせられ、いわば言語表現と局所的<場>(学園であろうと、職場であろうと、そして支援闘争であろうと)に限定させられているという情況の中で、逆に私達のより現存的な相互関係は裸形化させられている。ここでは表現は、より現存的な抽象と、より現存的な相互関係とにひきさかれ、<政治>の範囲が膨大になり、いわば<政治的行為>の意味はますます<政治集団>の位置と<個>の内部に沈潜するという構造が表われている。この時私達は三上流に<個>の書き言葉とゆるやかな相互関係という全く夢想にしかすぎない立て方でもなく、彼が私達にレッテルはりをした様な「レーニン主義」的構成もとらないと言った時、ではどこに私達の<集団>と<表現>を構成しうるかが問題になってくる。

この時おそらく私達にはそれほど選択の余地はない。それは表現の(とりわけ言語表現の)表出の基底と回収の<場>を開放するしかない。ここでは個と組織の間ではなく、個の内部でも組織の内部でも(個と個の問題としても)その事の想定の水準と現実性がどこまでくり込まれているかが問題になってくる。この事をより現実性の側で考えればおそらく、<集団疎外>の問題と<関係思想>に私達がどこまで踏み込めるかが問題になってくるという事だ。政治集団の内部における例えば、機関―地区、例えばB―A、という様な疎外の構造、組合内部においては執行部―組合員、解雇者―非解雇者という様な疎外の構造の内部でどの様な<関係思想>をあむ事ができるか、私達の表現がその範囲まで含めて、どこまで<表現>の規定力を持つ事ができるかが重要である。いわばこの所で、私達が社会的な<場>の思想構成に着目し、関与し、一方で自らの政治集団の内部自体を対象化する事の位置を想定する事ができる。ここで私達がこの間<情況的政治>と呼んできたところのものを更に<現存>の透視、更に<表現>の規定力の側と拮抗させる契機を獲得する以外にない。

私達はこの間の自らの表現とその過程での相互関係と討論に対して「どこか密室的なのでは」という自省の念にかられてきた。そして私達は今ここでその突破の方途を十分には述べる事はできないが、ただ私達が私達の<現存>をより対象的に扱う中からしかこの事は突破できないし、(そうでなければ空疎になるだけだし、そこを避けて通れる程、私達各自は余裕を持って政治をやっている訳ではない。)、そこで、私達が自己の表現の内部に<関係>を喚起させるイメージを吹き込む以外にない。そこのところで、私達の政治思想と政治理論の深化へ、外的表現と内的回収の深化へ向かうしかない。私達は限定されざるを得ない実践と、そこでの課題の抽出の限定性に自覚しながらもなお、そこへ全力を挙げて進むつもりである。

更に、また、現在より起て
自立と日常
(戦後)経済の思想的批判 ――吉本隆明
インフレー生活価値破壊へ日常圏から反撃せよ ――神津 陽
発行/蒼氓社　定価/250円

SECT6 大正闘争 資料集
内容
☆「SECT6」機関紙各号
憲法と革命
ブンド崩壊と社学同運動
非常の状況……他
☆「SECT6」パンフ1号・2号
☆大正闘争概観I・II
大正闘争60〜62年
☆解説 三上 治 吉本隆明
B5版¥1,000
発行/蒼氓社

<残部僅少・直接蒼氓社へ>

更に混沌から屹立するために

——片桐　徹——

11・19沖縄闘争の残したもの

私にとっての沖縄闘争裁判は、一審判決を経て早くも五ヵ年になんなんとしている。今回偶然一被告としての沖縄闘争裁判に関する自らの軌跡と現在性と方向性を記さねばならぬハメに陥ってしまった。以下は私なりの、沖縄闘争と（それにまつわる時代的感性の共有）への弔辞と獄中ー裁判、政治ー社会ー家族をめぐる独白である。

沖縄闘争はすでに遠くなってしまった。それはもはや歴史の時間をゆっくりと逆巻きに数回まわさなければならなくなって来ている。70年代の初頭も初頭の一事象にすぎないといえば、それまでの話しなのだから。当時、三里塚闘争（第一次、第二次収用阻止闘争）があり、砂川闘争（立川基地自衛隊進駐阻止闘争）があり、そして沖縄闘争（返還協定批准阻止闘争）が存在した。

私たちは（あるいは私は）、三里塚の闘いに、自然的自然に基づく自然的人間関係や生活諸関係に日本的抵抗の原質を発見しようとした。農村的自然にはどうみても破壊作用としてしか働かない公共性の衣をかぶった現代資本主義の象徴が、突然、強引に侵入し、定着せんとする際に反応する生活者達の共同的生活防衛意識の根拠とその階級的意味をつかもうと欲したのだ。（もちろん、生活者にとって、村落共同体的約束事の裏表と、自己の種々の生活利害とをうまくバランスシート上に乗せているのは自明の事である。）又、砂川闘争においては、諸個人の生活日常からある程度逸脱したところから、反基地ー反自衛隊ー反国家に連なる周辺住民（市民といってもよいかもしれないが）の社会意識に着目したといってよい。多様な地域的構成や階層的構成を抱えた都市における社会意識の混沌たる湧出に一定の意味を与えたはずだ。

沖縄闘争あるいは返還協定批准阻止闘争は、前述の三里塚、砂川闘争に連なりながらも、ある独自位相を有していたと思う。〈沖縄返還〉問題は支配者階級にとっては、民族の悲願と涙する程の戦後史を画する最大級の政治問題であり、すなわち日米安保ー戦後政治体制の最終的完成に向けての最後の懸案事項であった。又、沖縄民家にとっては、自らの民族的結合の契機を投げ捨て、屈辱と被圧迫の歴史を放棄してまで、日本国に帰順するか否かのすれずれの選択を迫まられていた。私達にとって（あるいは私にとって）、沖縄返還を取り引き材料とした日米安保体制ー戦後政治体制の最終的完成を徹底的に峻拒すること、更に、予想されるであろう（当時から現実になっていたが）、沖縄当地における社会的経済的混乱（観光開発の名による土地破壊、大工場進出による公害のまきちらし、暴騰物価インフレの激化、過剰な人間流出入による社会不安の増大など）は、戦後日本経済社会構成の矛盾の象徴的あるいは具象的現われとして、看過してはならなかった。

更に、日米両軍による広大な軍事基地の維持強化は、日米安保の名による沖縄島と沖縄民衆への犠牲の強制であり、日々の生命不安や死との隣り合せは、日本の民衆にとっての共通のものであり是非解体させねばならなかった。

私達はもちろん、人間の心身行動が、話し言葉や書き言葉の世界に直接に準拠して展開するものではないことを知っている。例えば、一見激烈なアジテーションの言葉の中味よりも、一瞬のうちによぎる不安感を沈黙の裡に共有したり、緊張の風圧を自己の内部に位置づけることにより、その時の行動範型を形づくったりするのがおおむねなのだ。私達にとっての一つの心身行動が（政治行動と言い替えてもよいが）、内部世界をたずねれば、純粋な個人的事情であったり、感性や心情の同時代共有の手さぐりであったり、相互関係的なルールとレールに身を寄せたりの結果として生まれることはしばしばある。しかしながら、関係的世界をつくる限り私達は言語を所有している。あるいは共同性の内部構成の外化した時言語的表現をとるのだ。そのことにより、個体の行動の意義や意味を了解づけ、存在の時間と空間を根拠づけると思う。

こうしてみると、私達にとって（あるいは私にとって）沖縄闘争ー政治行動は、「返還協定批准阻止！や日ー琉一体化粉砕！」と標榜した時の背後にひそむ、自己の色々な感情の襞や、時代や状況に対する思い入れや、他者像・関係像がどのように織りなされていたかが問われている。

私はここにおいて、このような闘いの理念的標語やその背後に沈んでいる感性や心情の共同性といわれるものも、根底から変容しかつ転換しているのだとさりげなく記すことができる。それは、当時コミットした諸個人の軌跡をたどってみても理解できるだろうし、現在的な立ち現れの内に見い出すことが可能である。

私はこのような現実に格別な感情の反応を示す必要は全然ないと考える。自己史の軌跡から振り返れば、確実な〝成熟〟過程であり、家族的日常の定着もしくは構造化であり、社会関係の拡がりである。時間の流れあるいは累積はそのようなものであり、何人とも押し止める事ができぬ。そうならば、私達は11・19政治行動の範型を過去のものとして、その理念や感性を歴史のカマドに投げこみ燃やしつくさねばならない。その燃焼のプロセスの中で新たな政治行動や思想的表現や関係基準やいわゆる共通の〝指標〟を発見し、つくり出せるかもしれないから。

獄中ー裁判過程から摘出するもの

私達は昨年冬において、実刑ー執行猶予の一審判決を受け、現在二審がほぼ年内結審の見込みで進んでいる。私達が「懲役……年の実刑に処す」と宣告されたとき、その内容が現実のこの世のものとして実感できなかったのは何故であろうか。確実に未来に到来するもののはずなのに、唯ちっぴり内部世界に異質の風がそよ吹くだけで通り抜けるだけの出来事としか感ぜられぬのはどうしてであろうか。それは、あたかも日常生活のサイクルの中で未来に対する漠とした不安がよぎったり、死へのおそれが何の脈絡もなく入りこみ瞬間的に通り過ぎるのと同じように。体験の累積からいえば、以前の未決収用体験があるのだから、それで闇に合せて解くことが出来たはずである。判決時における内部世界が即時に以前の獄中体験に結び付かなかったのは、やはり違った心像を私達が（あるいは私が）所有していたのではあるまいか。

ここで、再びもはや遠い過去のものとしてしか感得しえない、自己の獄中体験にさかのぼってみよう。〈獄〉といっても、24時間の日常生活のパターンはくり返される。マスメディアを通じて社会現象の情報は流入するし、尖端的風俗や流行や話題も知識することができる。又、四季おりおりの息吹きも花や風や気象が運んでくれもする。その意味で日常的社会生活の最低限の体裁は整っていることはいる。にもかかわらずに私達にヘビの生殺し的感覚を与えたり言いようのない疲労感覚を認めさせるのはどうしてであろうか。ひとりでは、どのように24時間の日常生活構成をそれなりに淡々と続けていたとしても、他者の眼、監視の眼から離れることが出来ない心理的拘束感がある。常に日常生活の演技者としてしか振舞えない自己の内部世界の緊張感。

その演技者たる己に慣れ切ってしまい、自己存在の陰影や二重構造が平板化することに無自覚になってしまう。あるいは、己の存在の原形質が心理の襞の奥深く沈み切ってしまい、内部世界を組み立ててバランスをとるのが極めて難しくなってしまう。監視者の眼を意識するあまり、自から監視者を監視するという倒錯心理に気付ついた時の驚き。ふたつめには、直接的関係の不在である。私達は日常普段は直接・間接の関係的世界に生息しているのである

が限定されたあるいは五管で知覚可能な時間と空間範囲での直接的関係の世界が生存し、生活する上の基底であることは自明のことである。その第一義的な基底としての直接的関係の場が不在であるのだから、そのままでは存在の非在感に陥入らざるをえない。己れの今までの体験をもとにして、知覚や感性を全力動員して、又過去の関係の積み重ねを思考の中に網の目のようにはりめぐらして、観念の内で直接的な関係の場を再現しようとする時の妄想発生はなかなか抑えがたい。

最も親しい人や家族や友人達の笑い声や悲しみに沈んだ表情や怒りくるった顔付きやを直接に目で見、耳で聴き、ニオイを嗅ぎ、手で触れることが出来ない場所と時において、必然的に関係妄想と倒錯意識は発生する。それ故私達は不断の発信作業による直接性の引き寄せと観念的世界における認識作業とのこねくりまわしの中で自身の肉体と精神を統括し均衡を保つよう努めるしかなかった。それは、時々においては、徒労であり空虚な営みであったといえるかもしれない。ただ、病院生活の患者がそうするように、未来に治癒するに一縷の望みをもって（現実には絶対に治らぬとわかっていても）日々を無機質に生きてゆく方法もあるはある。未来を確定した現実として思い描いて、今当該場所での自己の身を徹底的に空しくして時間の流れに身をまかせる方法である。このような意味においては〈獄〉とは自己の軌跡や現存性や射呈や関係像や、現実の関係的世界にとって来た表情や構えや思いいれを一つ一つ洗い出し整理する精神衛生上はあまり健康とはいえないあくまでも沈黙した精神葛藤の劇場といえるかもしれない

裁判やその背後に連なる監獄が国家の遺制や秘所として、民衆の頭上に君臨し、ある名状しがたい畏りやおぞましさを発揮する神通力はほとんど解体しているのではないか。昔子供を叱りつける時に「おまわりさんを呼ぶ！」とか「牢屋に入れるぞ！」と言って子供をふるえ上がらせた大衆の意識の深層は、もはや今日ほとんど発見出来ない。芸能人が懲役を受けたら、マスコミ世論のおもしろおかしげな記事に目をやり、これ又戯画的に憤激したり同情したりする。そこでは、裁判官や法吏が威儀をただしたり、格式ばって振舞っても大衆は全然無頓着である。

そこでは裁判などはほとんど形式化され形骸化されており、唯々当事者の生息した関係世界の異常さやねじれた異常心理に興味をそそぎ、あるいは自分達の日常生活での三角関係的からみ合いに二重写ししているだけの話しである。

又、政治家が拘留されたとかで、収容生活のあらゆる風景がイラスト入りで描かれて紹介される。食事の工合や入浴日や健康管理やこまごました雑事がマスコミによって紹介されている。大衆はもはや〈監獄〉や〈刑務所〉という固有名詞が換起するあの一種の隔絶感はほとんど忘れている。これはある意味では〈裁判〉の〈獄〉の大衆化、社会化なのだろうか。国家ー法ー裁判ー監獄に連なる歴史的共同観念はほとんど遷制的である。又、その体現者は道化役者を演ぜざるをえない。大衆は法や裁判を戯画化、漫画化して、自分達の日常生活（家族日常ー労働日常）の関係的確執や心理的惨劇を屈折させて重ねるしかない。

私達にとっての裁判の遠さ（しかし実はすぐそこの間近にあるのだが）は、自分達にとって元来異和なものだから遠いというよりも裁判や獄やそれにまとわりつく諸々の事象や範疇がもうすでに戯画化されて展開して私達の日常生活に入りこんで市民権を獲得しているからではないのだろうか。実のところ、私達にとって正念場と格闘すべきところはその内部における争いなのだ。

〈獄〉を無化しうる存在空間の創出

裁判は第二審の年内結審をメドに再びレールに乗り始めつつある。私達の被告団も一応その形はとどめてある。現在ある意味では、自らのコミットする根拠や立脚点を自己内においても相互関係においても鮮明にしなくては持続できぬところまで到達していることは事実である。現に、被告相互関係を観念の上下運動としてしか考えられなくて去った諸君もある。（獄中の後遺症の名ごりかもしれぬが）あるいは、単なる人間関係の総和とみなして、被害者ー支援者の助合い運動に傾斜し当体は生活実利にのめり込みを開始している人々も現出している。

私にはそう軽々と判定できぬが①不可避に持たらされてしまったあるいは持ってしまった相互規定的関係あるいは集団間関係は、その約束事、内規、基準が解体するまで、最終的に終了するまで、その収支決算と埋葬にはつき合った方がよい②それ自体は思想問題としては大きな意味や利益をもたらさないかもしれないが、同時代的行為や感性の共有体感を個体がいかにかみ下したり成熟の糧にして、新たな関係的世界の構成の水先案内人として屹立しうる条件を有していること③自分達の日常構成（家族や親族、友人関係など）に一番間近に接触している問題ゆえに、現実的実体的に生活判断ー他者へのイメージ像が要請されている。それは別の角度から見れば私達にとって最大の思想課題であるはずだ。

このように見れば、他者への倫理的思い入れではなく、観念的上昇の〈都合のよい場〉一般でもなく、唯裁判に身を入れているからだけではなく、個体の家族日常ー労働日常ー社会日常と交通する関係問題、思想問題が浮び上がってくるはずだ。そこにしか、実刑ー執行猶予と恣意的に差別化された倒錯の構造の逆転換は生まれてこないだろう。

未来の自分達の行動範囲が一定程度日程に上りはじめ鮮明になりはじめたこの時点においてより、自らの生活射呈を構想し、直接的生活諸関係をふくらましてさりげなく違った場所へすべり込ませる必要がある。そして、そこにおける連続性の結び方継ぎ方が重要な鍵となることは自明の理である。

私達は、彼岸の彼方へ戦士の休息然として旅立つほどカッコよくないし暇なことはできない。普通に憤どうり、笑い、悲しむだけである。一人の大衆として、思想者として淡々と振舞い存在をふくらますだけである。獄中は〈革命の学校〉なんて嘘のウソッパチなのだから。再び言おう。獄中とは身近な人を想い、感触を探り、友の喜怒哀楽を思い、仲間達の消息を浮かべ、文字通り日常的に生きようと欲求する世界なのだから。

私はそれが本当は〈たたかい〉の原点だと思っているから。

深層海流

☆ある日、電車に乗っていると三十男が乳のみ児をおぶっている、というでかでかとした写真が目に入った。「おかあさん」という生命保険の広告だった。要するに、母親が疾病でいなくなった時に家政婦を雇うとすれば一日五千円はかかる……ということであった。私はそこからある虚しさを感じ、少し考えてみた。

男が子供をおぶって電車に乗ることが恥しいことであるかどうか、あるいは、男は外で働き女は内で子供の面倒をみるべきものかどうか、知らない。もちろん、個々が育ってきた環境の中で独自の父親像や母親像が知らず知らずのうちに形成されていて、生活の形態に対して何らかの価値基準となっているかもしれない。私自身の中にもそれらのいくつかの形像が残されている。父はいつも火鉢の前に座り何もしゃべらず煙管をくわえていて、母は動き回り時おり居場所をなくす、というものである。私は高校、大学へ進む頃、これらに激しく抗した。私は、これらに抗したために多くの罰を受けた。何に抗したのだろうか。今から思えば、両親がつむぎ出しているつながりの卑少さに対してであろうか。ある日、父は私にふと「自分の家に不幸があると近所の者は腹のうちでは喜ぶものだ」ともらしたことがある。近所の仲間のためにせっせと働き、家では煙草をふかしているだけの父が、人知れず怨念を抱えていることに、私は息苦しく耐ええなかったことを覚えている。また、母は、病気をおしてまで近所の共同の仕事を受け負っては夜おそくなる父を、何故そうまでするのかと責めていた。その母も、ある機縁があって私が二年近く音信不通にした後、戻った時に私からちょっと離れてじろじろと私をみまわしていた。母は悲惨だったに違いない。

☆これらについて私は多くを語るべきではないかもしれない。今、私は一個の独立した家族を営んでいる。政治組織に位置し共同の負担を負い、家族の根源に向かって無数の断念と心的殺人を演じながら、私は、自分達が不幸になると他者は喜ぶものだ、という負の倫理をつぶやくことは禁じられている。（S）

編集局通信

▼8月15日号を休刊にしたために、次号発刊日たる9月1日を厳守せんとの編集局員の意図は、残念ながら今回もはたされなかった。これは、別段、夏休み態勢の余波が我々の内部に浸入して、少し気が抜けていた訳ではないのだが。本号の遅れによって約一ヶ月半の空白が生じていることについては各員それぞれ思いは複雑だ。

▼本号の作製段階で、吉本隆明の6・18集会についての「情況への発言」や三上治の「乾坤」創刊号が発行された。編集局としてはなるべく、これらの批判に則した内容的な企画を意図したのであるが、今回はほとんどはたされていない。立花薫の文章だけが、この時期に重なっただけであることを記しておきたい。

▼「叛旗」紙発行の持続的な課題と、「架橋」問題は、現在の政治党派のかかえる切実な課題との連関ですでに9ヶ月の内部討論を経過してしまった。これまでの討論が、どの様に具体的、現実的な状況を創出可能かは依然として未知ではあるが、我々は、出来得るかぎり密室化を相対化する努力を続けたいと思う。

▼読者との日常業務をめぐるトラブルは大変少なくなっているが、しかし、我々の側の反応の遅れがちな点は、いつも反省せざるを得ない。この点については、いささかの怠慢も想定されていないのであるが、おのづから共同作業の困難さに直面する毎日である。契約切れ、住所変更については今後とも御協力を御願いする。（K記）